先端技術投資業界で圧倒的トップシェアのVC

環境エネルギー産業の可能性を徹底追求

イノベーションエンジン㈱　代表取締役　**佐野　睦典** 氏

運用総額90億円、投資会社数50社の実績

イノベーションエンジン㈱（東京都港区芝浦3-11-13、Tel.03-5730-6721）は、2001年1月に設立され、「新産業フロンティア」探索をキーワードに、先端技術産業発掘と成長支援に全力を挙げている。「日本初のナノテクファンド」として40億円のファンド規模を目標に資金調達に成功し、現在の運用総額は90億円を超えている。また、投資した会社数も50社に上っている。

今回は、先端技術投資業界でトップシェアを獲得している同社の代表取締役 佐野睦典氏に話を伺った。

日本初のナノテクファンドを創設

――京都大学のご出身ですね。

佐野　香川県坂出市に生まれ、大阪で育ち、京都大学法学部に学んだ。卒業後は野村證券に進み、3年間営業を続け、その後、野村総研に移り、情報通信を中心とした外国株のアナリストを務めた。ベンチャー投資の世界にひかれ、ジャフコに移籍し、投資調査部長、産学連携チーム ジェネラルマネージャーを歴任する。その頃は、日本初の大学発ベンチャー企業に投資する専門ファンドを相次いで設立した。インキュベーションタイプのベンチャーキャピタルの必要性を強く感じ、2001年1月にイノベーション・エンジンを旗揚げする。

――佐野さんは、イノベーションの率先実行を重視していますね。

佐野　21世紀のニッポンは、自らが新たな価値を創造し、世の中に普及させていくイノベーションが重要だ。日本人は元来、先端技術という強みを持っており、これを世界に貢献できる価値創造につなげなければならない。当社は、その先頭に立って、先端技術産業の発掘を進め、総力を挙げてサポートしていく。

――日本初のナノテクファンドを作ったことで評価されました。

佐野　当社を有名にしてくれたのはナノテクファンドであり、ナノ材料、ナノ計測、ナノ加工、ナノデザインなどに多くの投資を行ってきた。

大阪のオーセラは、優れた耐熱衝撃特性を有する高機能ファインセラミックス材料およびその成形体を扱っており、有力なベンチャーとして育てていきたいと考えている。1800℃まで耐えられる材料であり、そのまま水につけてもクラックが入らないという技術は、自動車メーカーの排ガスフィルターなどに応用できると見ている。

ファインディバイスというベンチャーにも注目しており、ここの技術はレーザーにより樹脂と樹脂を接着剤なしで付けていくという優れものであり、自動車メーカーのランプなどに応用できる。

リスクをとっても挑戦する環境エネルギーベンチャーに注目

――半導体や材料分野にも多く投資していますね。

佐野　半導体では、スーパーピックスマイクロテクノロジーに注目しており、30万画素から200万画素の良質なCMOSセンサーの設計開発・製造に強みを持つ。中国の携帯電話にはすでに採用されており、そこそこのスペックでコストが安いことが特徴だ。

静岡にあるFJコンポジェットは、炭素繊維などの材料を中心とした複合材料による高性能ヒートシンク、燃料電池セパレーターなどの開発・製造を行っているが、テーマがすばらしいので、今後に期待する。

また、東京のグラフトンラボラトリーズは、放射線グラフト重合技術を持ち、産業用途の不純物除去フィルターから消費者用の消臭剤まで高機能かつ高性能な化学吸着材料の開発・製造を行っている。アプリとしては、マンションなどのシックハウス対応、さらには半導体製造プロセスにおける不純物除去が期待できる。

――最近では、環境エネルギー分野に注目しているそうですが。

佐野　世界的なグリーンニューディール革命が進む以上、環境や新エネルギーに関連するベンチャーに注目するのは当たり前のことだ。ただ、環境エネルギー産業は、大手が担っているケースが多く、なかなかこれは、というベンチャーを見つけることが難しい。しかし、リスクをとっても挑戦したいという環境エネルギーベンチャーの情報はきっちりと集めており、今後、注力していく姿勢だ。

ファイベスト、フィルテックなど有力ベンチャーに多くの期待

――日本のベンチャーの問題点については。

佐野　米国などに比べ、ベンチャーの掲げるテーマのネタそのものが少し貧弱だと思う。また、成果が出るまでの時間がかかり過ぎている。そのために投資効率が悪い。一方で、日本社会の一番悪いところは、人の流動性が少ないことであり、優秀な人材が動かない。それゆえに、ベンチャーにすばらしい人材が供給されない、という恨みがある。

――IPOによるキャピタルゲインの候補を挙げてください。

佐野　すでに述べたスーパーピックスに加え、ファイベスト、クレステック、ポリゴン、リテールメイト、フィルテックなどがおもしろい。ファイベストは、10ギガタイプの小型受光モジュール／発光モジュールを手がけており、光通信システムなどに有力なアプリがある。クレステックは、超高性能電子ビーム直描装置の開発・製造を進めている。フィルテックは、太陽電池製造用のCVDやLED製造用のMOCVDを手がけている。

日本企業の強みは、部品、材料にあると考えており、付加価値の高いテーマを持った製品開発を進めている企業は、いずれ抜け出してくると期待している。

「個の自立による価値創造」を新たな運動論に

――イノベーション・ウィングという100％子会社をお持ちですね。

佐野　この会社は、ベンチャー企業に対する会社設立から株式公開までの経営管理のトータルサービスを提供するものだ。具体的には、経営管理コンサルタントとして外部からアドバイスする立場と、管理本部長として顧客企業の中に入り、経営管理の仕組みやルーティン業務を統括する立場の両面からサービスを行っている。要するに、具体的な立ち上げに際しての実務を担っているのだ。

――さて、経済が後退する日本の現状にあって、佐野さんは何が一番必要と考えていますか。

佐野　何といっても、一人ひとりが明確なビジョンを打ち出し、自らリスクをとって果敢に挑戦していくという気風を作ることだ。いまだに組織中心型の日本社会ではあるが、「個の自立による価値創造」を新たな運動論にすべきだ。確かに、円高・株安など日本経済を取り巻く情勢は良くない。しかし、潜在的に持つ日本の技術の可能性は無限にあると考えている。

今必要なことは、「坂の上の雲」を目指して戦った明治の若者たちのスピリッツを想起することではないだろうか。

（聞き手・発行人　泉谷 渉）